

個人レポート

越前の初期詠出和歌における視覚的效果

—『正治後度百首』『新宮三首歌合』の本歌取から—

持田玲

一 はじめに

後鳥羽院歌壇で活躍した歌人の一人に、越前という女房がいる。本稿は、『正治後度百首』『新宮三首歌合』における越前の和歌について、本歌取の側面から特徴を明らかにするものである。越前の本歌取については、渡邊裕美子氏が『千五百番歌合』を対象に検討しており、越前の古歌撰取について、「本歌に贈答した形」や「単純な物の置き替え」が多¹いこと、「慣用歌句の利用」が目立つことを明らかにしている。更に、その特徴から、越前の本歌取が、前時代の完全な回帰ではなく、『新古今和歌集』の前衛歌人の古歌撰取と「全く無関係に詠まれたわけではない」と評している。『正治後度百首』『新宮三首歌合』は、『千五百番歌合』の前年、正治二年（一一二〇）に行われ、越前が最も早い時期に詠出した百首歌、歌合である。本稿では、右記に示した渡邊氏の指摘を踏まえながら、越前の初期詠出和歌における本歌取にいかなる特色を見出せるのか考えたい。なお、和歌の引用は、『新編国歌大観』に拠る。その他²の本文は引用毎に示す。

二 女房歌人越前の人生

越前は、女房歌人として三一〇首余りの和歌が残っており、勅撰集には二十六首入集³している。家集はなく、歴史的な業績を追うことが難しい。前述の通り正治二年後半から歌壇の活動がみえ、翌年建仁元年（一一二〇）には『老若五十首歌合』『千五百番歌合』などに詠出し、建永元年（一一〇六）までは後鳥羽院歌壇で活躍したという。その後約十年の空白の後、建保三年（一一二五）に『道家百首』、翌年には順徳天皇歌壇の『内裏百番歌合』に詠出し、更に三十二年後、宝治二年（一一四八）『後嵯峨院御歌合』に詠進したのが最終業績と考えられている。また、『現存和歌六帖』の作者であったため、建長二年（一一五〇）ごろまでは生存していたとされている。生没年は未詳であるが、保坂都氏は、建仁元年には二十歳位だったと推定しており、後鳥羽院と年齢が近かった可能性がある。『源家長日記』には、越前が後鳥羽院歌壇に女房歌人として召し出された経緯が記されており、後鳥羽院歌壇形成の過程を知る上で重要な手がかりとなっている。後鳥羽院は「女の歌詠みは、この古人たち亡からむ後は、更に絶えなむずる事を、口惜しき事にたびたび仰せら

る」と、殷富門院大輔や讃岐などが高齡のために、女性歌人が絶えることを嘆いている。これが、越前をはじめ、俊成卿女、宮内卿らが見出されるきっかけとなった。

これを承り詰めて侍る折りしも、親しき女房のもとに巻物の侍るを取りて見れば、女の手にて歌を書きたり。これを尋ねれば、「七条院に候ふ女房越前と申す人なり」と聞きて、この歌を取りて持ちて参りたれば、悪しからずやおぼしめしけむ、「行方尋ねよ」と仰せらるれば、まかり出でて尋ぬるに、大中臣公親が女なり。さるは重代の人なりと聞きて、此のよしを申す。範光朝臣承りて、車迎へに遣はす。今は候ふめり。

その歌の奥に侍りし、

さぞなげにこれもよし無きすさみかな誰かあはれをかけてしのばむ

これを御覧じ出でて、殊に御目とどめさせ給ふ。(中略)この女房を試みむとおぼしめして、召し出だして、秋の終はりの事にて侍りしに、「此のころの歌詠め」と仰せられたりけるに、「嵐を分くる小牡鹿の声」など聞こえしは、その折りとぞ。

右の記事から、後鳥羽院が越前の歌を見てその行方を尋ね、召し出したことが分かる。「重代の人」とあるのは、父大中臣公親の祖先が、頼基をはじめとする歌人の家であったためであろう。大中臣家には、伊勢大輔や康資王母(四条宮筑前)、安芸などの女房歌人も多く、後鳥羽院が越前を歌壇に迎えた理由の一つになった可能性が高い。本文中に「七条院に候ふ女房」とあるように、越前は院の母である七条院殖子の女房であった。その後、院の皇女である嘉陽門院礼子の元に出仕したが、建保四年の『内裏百番歌合』までの歌集には、「越前」「越前女房」「女房越前」

との呼び名で、嘉陽門院の名はない。そのため、当初七条院殖子の女房であったが、歌人として後鳥羽院に召し出され、その後更に嘉陽門院礼子の元に出仕したと考えられている。同じく和歌の才能を認められて院の女房となったが、夭折してしまった宮内卿とは対照的な人生であった。

三 『正治後度百首』と『新宮三首歌合』

越前に対する先行研究には、保坂都氏をはじめ、近年には、渡邊裕美子氏や奥田久輝氏、今井明氏の論がある。保坂氏は、大中臣家の和歌の伝統を再興した人物として、「閨秀歌人と讃えるべき」としている。一方今井氏は、『正治後度百首』九四八番歌の本歌取が、渡邊氏の指摘と重なることを述べており、越前の和歌を「本歌に若干の変化をつけて面白さをだそうとし」ていると評している。先述したように、越前にはまとまった家集がないことから、先行研究も少ないのが現状である。

本稿の調査対象の一つである『正治後度百首』は、『正治初度百首』に次ぐ後鳥羽院主催の二度目の百首歌で、正治二年十月以降十二月までに催されたとされている。『新古今和歌集』には十首入集しており、越前の歌は二首採られている。歌人には、初度百首の作者でもある後鳥羽院、慈円、藤原範光の他に、若手の歌人が中心をなしている。初度百首と比較すると優れた歌が少ないことも指摘されているが、宮内卿や越前の初期和歌を検討する上でも、重要な資料であるといえる。一方、『新宮三首歌合』は既に散逸しており、『明月記』によれば十一月七日に催されたと分かる。『新宮三首歌合』の和歌本文は、現在『新古今和歌集』や『新勅撰和歌集』などから窺える。歌壇に登場したばかりの越前は、どのように古歌撰取を行い、和歌を詠出していたかを以下で検討する。

四 越前の本歌取

『正治後度百首』『新宮三首歌合』内で、本歌取が指摘されている和歌は十首余りあるが、本稿では五首を取り上げたい。なお『新宮三首歌合』の和歌については、『新古今和歌集』より引用を行った。歌頭の英数字は便宜上の歌番号であり、括弧内に題と『新編国歌大観』の歌番号を記した。勅撰和歌集の場合は、巻名や歌番号を記載した。

『正治後度百首』

(1) ながむれば行末遠き霞かなのどけき御代の春のみそらに

(春・霞 九〇三)

(2) 水そこも氷とちてや冬くればながれもやらぬ玉川の水

(冬・氷 九四八)

(3) 秋はただ心よりおく夕露を袖のほかともおもひけるかな

(雑・夕 九六六)

(4) これやこのさしでのいそのはま千鳥今より更に八千代とをなけ

(雑・祝 九九六)

『新宮三首歌合』

(5) いく夜かは月をあはれとながめきて浪をりしくいせの浜をぎ

(『新古今和歌集』巻十・鞆旅 九四三)

(3)の歌については、『新古今和歌集』にも入集しているが、本稿では『正治後度百首』より引用した。

まずは(2)の歌から検討する。(2)は『堀川百首』の河内の歌、

(a) 水上にいくへの氷とちつらなれもやらぬ山川の水

(冬十五首・凍 一〇〇八)

が本歌と考えられている。二首を比較すると、基本的に(2)の越前歌は(a)

の歌の語句や構成をなぞっており、(2)で新たに付加される要素は見受けられない。更に、「水上」を「水底」、「山川の水」を「玉川の水」へと語句を変えているが、表面的な変化にとどまっている。今井氏が着目するように、(2)の本歌取は、渡邊氏の『千五百番歌合』における本歌取の方法「単純な物の置き替え」に該当している。渡邊氏は、「単純な物の置き替え」について「四季歌で他季に転換する場合」としているが、(2)では更に同じ季節で語句の一致が起きている。同じく本歌からの変化が少なく、単純な本歌取にとどまっている歌が(1)と(4)である。

(1)は『正治初度百首』の後鳥羽院詠、

(b) いつしかとかすめる空ものどかにて行すゑとほし今朝のはつ春

(春二十首 一)

を受けて詠作されており、御代を祝する歌になっている。山崎氏が指摘するように、「行末遠き」「霞(かすめる)」「のどけき」「春」「そら」の五語が一致しており、越前が後鳥羽院を強く意識していたことも窺える。「行く末遠し」の語は、二首共通して後鳥羽院の治世の永続性を示す語であり、(1)の歌は基本的に(b)の歌の語順を変えるのみである。渡邊氏が位置付けた越前の本歌取の特徴には当てはまらないが、あまりにも本歌との距離が近い。続いて、(4)の歌を見る。(4)は『古今和歌集』の題しらず、よみ人しらずの歌、

(c) しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみ世をばやちよとぞなく

(『古今和歌集』巻七・賀 三四五)

が本歌とされている。歌枕「さしでのいそ」、「千鳥」「八千代とをなけ」の語句と位置が共通している。更に、言葉の置き換えも「しほの山」から、「さしでのいそ」の枕詞である「これやこの」、「すむ千鳥」から「はま千鳥」と「単純な物の置き替え」をしており、「今より更に」の一語

で本歌からの変化を付けている。『正治後度百首』には、同じく(c)を受けた源具親の歌、

今ぞしる君が御代をとかねてよりさしでの磯の千鳥鳴くなり

(祝言 三九八)

もある。歌枕「差出の磯」は、(b)の歌の影響を受け、多く賀の歌に用いられ、慣用的に「千鳥」が詠みこまれたという。そのため、(4)の歌は、「単純な物の置き替え」だけでなく、「慣用歌句の利用」という特徴も見られ、本歌から新鮮さのない歌になっていることが分かる。

(1)、(2)、(4)の三首に着目すると、越前の本歌取は単純であり、本歌と非常に近似していることが分かった。今井氏が、(2)の歌を元に、

後鳥羽院歌壇登場直後の新進の女流歌人越前の作にはこうしたレベルの作が多く含まれているが、その詠作方法にはすでに越前の特徴がはっきりと現れている。¹⁶⁾

と述べているように、『千五百番歌合』で見られた本歌取の特徴は、すでに『正治後度百首』から見られることも明確だろう。『千五百番歌合』では、単純な本歌取であっても新たな趣向を提示し評価された歌もあったが、(1)や(2)、(4)の歌は、新しい視点を見出すことは難しく、否定的にとらえられた可能性が高い。

一方で、本歌から新たな視点を付与した(5)のような例もある。(5)の本歌は、

(d) 神風やいせのはま萩をりふせて旅ねやすらむあらし浜べに

(『新古今和歌集』 卷十・鞆旅 九一一 『万葉集』 卷四・鞆旅 五〇〇) とされており、『万葉集』では、碁檀越の妻の歌として入っているが、『新古今和歌集』は題しらず、よみ人しらずとなっている。「いせの浜をぎ」が共通語句であり、「をりふせて」と「をりしく」が同義である。同じ

鞆旅歌で、伊勢の浜辺で浜萩を折り敷いて寝るといふ大意に変化はないが、越前の(5)の歌では、新たに月を眺める様子が詠まれており、月の美しさにしみじみと感慨にふける旅情が表現されている。更に、空に浮かぶ月と、浜辺で旅寝をする人との物理的距離、それに伴う自然の壮大さが和歌に與行きを与え、視覚的な効果によって本歌から和歌世界を深化させている。(5)の歌は、『新古今和歌集』にも入集し、源通具以外の四人の撰者が撰んでいる。大中臣家が「神祇の官人で、代々伊勢祭主を世襲し」た¹⁷⁾という点も相まって、越前の和歌の中でも評価の高い歌であったのではないか。同じ視覚的な効果が見られるのが、(3)の歌である。(3)は、(5)と同じく『新古今和歌集』へ入集した一首である。藤原忠国が詠んだ、

(e) 我ならぬ草葉もものは思ひけり袖より外におけるしらつゆ

(『後撰和歌集』 卷十八・雑四 一一二八)

が本歌とされ、「おく」おもひける「袖のほか」の語が一致し、「しらつゆ」を「夕露」へと置き替えている。(e)の本歌は、草葉に白露が置いている様子から、私の袖が濡れているのと同じように草葉も思い悩んでいると擬人化して詠んでいるが、(3)は、「袖のほか」を本歌と同じ四句目に置き、倒置法を使用して、本歌を反転する形をとっている。(3)は、草葉にも置くと思っていた露は、自分の袖に置く涙の露そのものであるという意で、自然の草葉から自らの物思いの深さを知ることになる。久保田淳氏は、「本歌が内より外へという見方であるのに対し、これは外より内へとという方向を取る」と述べている。本歌を切り返す側面があるため、「本歌に贈答した形」とも取れるが、視点を反転させた(3)の歌は、本歌にはない新しさが見える。

(3)と(5)は、複雑な本歌取は行っていないが、本歌から視覚的な変化をつけることで、心情がより表出された歌になっている。渡邊氏は、先に

引用した越前の本歌取の特徴について、定家らの「前衛歌人とは一線を画する越前歌ではあるが、新古今歌壇で全く否定されてしまっているのではない⁽⁹⁾」とする。(3)と(5)は、その指摘にまさに該当する和歌であると考えられる。更にはその特徴には、古歌からの視覚的な要素の付与や視線の移動という点が見出される。本稿では調査対象が少ないため、明確に結論を出すことは難しいが、越前歌の一つの傾向と言えるのではないか。

五 まとめ

以上のように、『正治後度百首』『新宮三首歌合』における本歌取を確認すると、『千五百番歌合』に見られる越前の本歌取の特徴と一致する点が多いことが分かった。渡邊氏の指摘する特徴は、『千五百番歌合』だけではなく、越前の本歌取の基本姿勢として認められうるものではないかとも考えられる。一方で、『正治後度百首』『新宮三首歌合』の本歌取には、本歌を踏まえつつも、本歌をなぞるだけではなく、視覚的な工夫が見られた。同じ『正治後度百首』には、以下のような越前歌もある。

逢坂の山立ちこえし春霞都の空ぞとまりなりける
(春・霞 九〇〇)

春霞が逢坂の山を越えて、都の空にとどまっている様子を詠んだ歌で、春霞を通して逢坂の山と都を繋いでいる。表現の細かな機微は感じられないものの、一首の中に大きな視覚の移動を伴う。本稿で明らかになった越前の視覚的な工夫は、右記にある歌のように、本歌取の和歌に限らない可能性も高い。越前の和歌については、いまだ明らかにされていない点が多くある。今後更に調査を続けていきたい。

注

- (1) 渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』「第四節 越前の本歌取―『千五百番歌合』をめぐる―」(笠間書院、二〇一〇年十月)、初出「越前の本歌取―『千五百番歌合』をめぐる―」(『文芸と批評』七卷三号、一九九一年四月)、「越前の古歌撰取―『千五百番歌合』にみる―」(『国文学研究』一一五号、一九九五年三月)
- (2) 越前の作歌数について、保坂都『大中臣家の歌人群』第一章、(四)越前(武蔵野書院、一九七二年)では、三一三首、奥田久輝「八条院高倉と越前―新古今歌と作者―」(『園田国文』十三号、一九九二年三月)では、三一六首とされている。
- (3) 勅撰集入集歌数について、保坂前掲(2)稿では二十四首、奥田稿では二十五首とするが、『新編国歌大観』は二十六首となっている。また、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四年)でも田淵句美子氏が二十六首としているため、二十六首に従う。
- (4) 前掲(2)に同じ
- (5) 藤田一尊『中世日記紀行文学全評釈集成 第三卷 源家長日記』「十三、女歌人の召致」(勉誠出版、二〇〇四年)
- (6) 前掲(5) 藤田稿
- (7) 山崎桂子『正治百首の研究』第二篇、第三章、第一節、十、越前(勉誠出版、二〇〇〇年)
- (8) 前掲(1)(2)論文、今井明「女歌人たち」(『国文学解釈と教材の研究』四十二卷十三号、一九九七年十一月)
- (9) 前掲(2)に同じ
- (10) 前掲(8) 今井稿
- (11) 山崎桂子『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四年) 日本文学 Web 図書館版「正治百首」の項
- (12) 『正治後度百首』における越前の本歌取についての指摘は、保坂都『大中臣家の歌人群』第二章、(二)歌風(武蔵野書院、一九七二年)、初出「越前の

歌風」(『学苑』三六二号、一九七〇年二月)、前掲(2)奥田稿、(7)山崎稿、(8)今井稿など

(13) 前掲(8) 今井稿

(14) 前掲(1) に同じ

(15) 前掲(7) に同じ

(16) 前掲(8) 今井稿

(17) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇～二〇〇二年) Japan Knowledge 版「大中臣」の項

(18) 久保田淳『新古今和歌集全注釈 二』(角川学芸出版、二〇一一年)

(19) 前掲(1) に同じ

参考文献

・今川文雄『訓読明月記 第一卷』(河出書房新社、一九七七年)

・片桐洋一『新日本古典文学大系 6 後撰和歌集』(岩波書店、一九九〇年)

・『新編国歌大観』(角川学芸出版、一九八三～一九九二年) 日本文学 Web 図書館版

・峯村文人『新編日本古典文学全集43 新古今和歌集』(小学館、一九九五年)

・寺島恒世『和歌文学大系 24 後鳥羽院御集』(明治書院、一九九七年)

・久保田淳、馬場あき子『歌ことは歌枕大辞典』(角川学芸出版、一九九九年)

日本文学 Web 図書館版「指しの磯」の項

・青木賢豪ほか『和歌文学大系 15 堀河院百首和歌』(明治書院、二〇〇二年)

・兼築信行「歌人たちと社会―七条院とその周辺―」兼築信行、田渊句美子編

『和歌を歴史から読む』(笠間書院、二〇〇二年十月)

・久保田淳『新古今和歌集全注釈 三』(角川学芸出版、二〇一一年)

・田渊句美子『異端の皇女と女房歌人 式子内親王たちの新古今集』(角川学芸出版、二〇一四年)

その他、注に記載した文献